

童話「かちかち山」再話の比較

—機能言語学的分析に基づく幼児への言語指導に関する一試案—

会津大学短期大学部

社会福祉学科

阿部 聡

童話「かちかち山」再話の比較

一機能言語学的分析に基づく幼児への言語指導に関する一試案一

阿部 聡

平成27年1月10日受付

【要旨】本稿では童話『かちかち山』の、4つのテキストを機能言語学的観点から分析し、比較を行い、その結果をいかした指導法の検討を行った。ジャンル構造分析から、4つのテキストの間には文字数の差はあるが基本的な構造には大きな相違がないこと、しかし、1つのテキストが他の3つのテキストとは構造に違いがあることが分かった。また、語彙-文法の分析（起動的解釈）からは、悪役であるたぬきの、悪事への関与度の差を捉えることができた。これらの結果から読み聞かせなどの指導上の留意点を検討した。

1. はじめに

幼児の言語発達、言語教育にとって童話や絵本は重要な役割を担うと言われている。『幼稚園教育要領』の解説のなかで、次のように述べられている（岸井他 2000）。

保育者が幼児に教材を提供するとき、その教材のもつ特色や教育的意味を深く理解していることは重要なことである。（中略）保育者はできるだけ多くの絵本に触れ、それらのもつ魅力をまず自分が受け止め、生の感動を幼児に伝えることが大切である。（略）

お話（物語）は、絵本と同じく想像の世界で遊ぶ楽しさを与え、心と言葉を豊かに育てることができるものであるから、幼児は十分に見聞きする機会を持つことが望ましいのであるが、保育者が、物語を既成の童話や民話・昔話にこだわって、自分はいあまり物語の数をもっていないと思ひこんだり、表現に自信がなかったりすると、幼児から大切なチャンスを奪ってしまうことになる。（pp. 41-2）

また、同書では「量ではなく質の面で幼児の言葉を豊かにする、という意味において、絵本・昔ばなし・童話などが、よき言語環境を提供する」（p. 60）とも述べられている。しかし、同書では具体的な童話・絵本の活用法や、保育者が童話などをどのように受け止め、どのような視点でとらえるべきかについてはあまり触れられていない。

本稿では、比較的入手が容易であった童話『かちかち山』の再話の構造分析を通じて比較を行い、

①テキストの構造の違い

②語彙—文法の違い

を明らかにし、

③それらの違いを踏まえた指導法の検討

を行う。なお、本稿の分析はパイロットスタディ的な位置づけである。

2. 分析対象

本稿で分析対象としたのは以下の4つのテキストである。

①楠山正雄（1983）青空文庫「かちかち山」底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社。
http://www.aozora.gr.jp/cards/000329/files/18377_11982.html（以下、楠山テキスト。）

②平田昭吾（1985）『世界名作ファンタジー 14 かちかち山』ポプラ社。（以下、平田テキスト。）

③竹崎有斐（2011）「かちかち山」（学研教育出版編）『名作よんでよんで 日本の昔ばなし 20 話』学研教育出版。（以下、竹崎テキスト。）

④ささきあり（2014）『親子でわくわく！ 日本むかしばなし絵本』西東社。（以下、ささきテキスト。）

文字数は次の通りであった。

①楠山テキスト 4,769 字

②平田テキスト 3,242 字

③竹崎テキスト 1,106 字

④ささきテキスト 1,316字

②の平田テキストは「かちかち山」だけからなる絵本であるのに対して、③竹崎テキストと④ささきテキストは童話集の1篇としての「かちかち山」である。

3. テキスト構造の分析：ジャンル構造

本稿ではテキスト分析の枠組みとして選択体系機能理論を援用した。選択体系機能理論では、テキストの構造をジャンルという観点から分析を行っている。ジャンルとは段階的、目的志向的、社会的過程であるとしている(Martin & Rose 2008)。段階的というのは、コミュニケーションの目的を達成するためには、2つ以上の段階を踏むことが多いからであり、目的志向的というのは、最終段階を達成できない場合には不満が募る(テキストとして完成しない)ということであり、社会的というのは書き手が特定の読み手にむけてテキストをかたちづくるということである。

ジャンルは段階的で目的志向的であるということは、それぞれの目的に応じたテキストの典型的な段階・展開構造を持つということでもある。テキストには「はじめ-なか-おわり」という流れがあるが、それぞれの段階はテキストの目的を達成するためにそれぞれ特定の機能を担っている。

本稿の対象としたテキストは物語のジャンルにあたる。物語の目的は「たのしませること entertaining」である(Martin & Rose 2008)。この目的を達成するためには、テキストの「なか」で複雑化 complication があらわれ、その後解決 resolution があらわれるという構造をとる。英語の物語ジャンルの典型的な構造は次の通りである。

(1)

Orientation 導入	^	Complication 複雑化	^	Evaluation 評価	^	Resolution 解決	^	(Coda) 終結部
-------------------	---	---------------------	---	------------------	---	------------------	---	---------------

^は構造要素の順序を示す。たとえば、導入の前に複雑化が来ることや複雑化の前に解決が来ることはない。()はその要素の出現が義務的ではないことを示す。

(1) をそのまま日本語テキストにも当てはめるのは文化のコンテキストの違いもあるため無理があるかもしれないが、本稿の分析ではほぼこの通りであった。以下、簡単な分析を示す。

(2) 楠山テキスト

Orientation	おじいさんとおばあさんがいた。
Complication 1	おじいさんが畑で働いていると古だぬきが現れ畑を荒らし、いたずらをする。
Evaluation 1	おじいさんは困る。
Resolution 1	おじいさんは罌をしかけたぬきを捕まえ家に持ち帰る天井の梁にぶら下げ、おばあさんに狸汁を作るように言う。

Complication 2	たぬきがおばあさんをだまし、縄をほどかせる。たぬきはおばあさんの脳天から杵を打ち下ろす。おばあさんは目を回し倒れて死んでしまう。たぬきはおばあさんを料理し、おばあさんに化け、おじいさんに婆汁を食べさせる。
Evaluation 2	おじいさんはおばあさんの骨を抱えて泣く。そこにうさぎが現れ、話をきく。うさぎはかたき討ちを誓う。
Resolution 2	うさぎは穴にこもっていたたぬきをかち栗でおびき寄せ、しばを背負わせる。そこに火をつけ、たぬきはやけどをする。あくる日うさぎはみそに唐辛子をすりこみ、それをもってたぬきを見舞う。たぬきの背中にみそを塗る。4、5日後、うさぎはたぬきを海に連れ出す。たぬきは泥船を作り沖に出る。泥船は崩れ出し、沈む。たぬきも沈む。

(3) 平田テキスト

Orientation	おじいさんとおばあさんがすんでいた。
Complication 1	いたずらたぬきが畑に登場、大根を盗む。
Evaluation 1	おじいさんが怒る。
Resolution 1	おじいさんが罾をしかけたたぬきがかまる。狸汁にするべく家に連れて帰り天井に吊るす。
Complication 2	たぬきが家にいるおばあさんを騙し、縄をほどかせ、杵でおばあさんを殴る。おばあさんは気を失う。たぬきは食べ物を盗み逃げる。
Evaluation 2	おじいさん帰宅。倒れているおばあさんを見つけ大声を上げる。うさぎが登場し、おばあさんの話をきき怒る。
Resolution 2	うさぎによるかたき討ち。もちを焼きその匂いでたぬきをおびき寄せる。しば刈りに出かけたたぬきが背負ったしばに火をつける。やけどを負ったたぬきの背中にくすりと称してからしを塗る。たぬきを釣りにさそい、泥船にたぬきをのせ、沖でたぬきがおぼれる。
Coda	たぬきは反省する。うさぎもおじいさんもおばあさんもたぬきをゆるし、餅を一緒に食べて仲直りを祝った。

(4) 竹崎テキスト

Orientation	じいさんが山の畑で豆をまいている。
Complication 1	たぬきが出てきて悪口を言う。
Evaluation 1	じいさんが怒る。
Resolution 1	じいさんがたぬきを捕まえ、家の天井に吊るす。

Complication 2	家ではばあさんが粟をついていた。たぬきは、ばあさんをだまし、縄をほどかせ、ばあさんを殺し、ばあさんに化けた。帰ってきたじいさんはばあさんに狸汁はできているかと尋ねるが、ばあさんに化けたたぬきが「できたのは婆汁さ」と言って逃げる。縁の下にはばあさんの骨と着物がある。
Evaluation 2	じいさんが泣いているとうさぎがくる。
Resolution 2	うさぎはじいさんの話を聞くとたぬきのところに出かける。二人で山に行きたぬきにしばを背負わせ、火をつける。たぬきは火をやる。次の日、うさぎが薬屋になってたぬきのところを訪れる。やけどの薬だと言ってとうがらしを塗り込む。しばらくして、うさぎが船を作っているとたぬきがやってくる。たぬきが船を作ってくれというので、うさぎは泥と松脂で船を作ってやる。二人で沖に出て、うさぎは船べりをたたく。たぬきもそれを真似て、泥の船にヒビが入り、水が漏れ、たぬきと一緒に沈む。

(5) ささきテキスト

Orientation	おじいさんとおばあさんがいた。毎日畑を耕していた。
Complication 1	たぬきがやってきては、畑のいもを食べ、ふたりをからかった。
Evaluation 1	おじいさんは怒った。
Resolution 1	おじいさんは罾をしかけ、罾にかかったたぬきを家の柱に縛り付けた。
Complication 2	たぬきがおばあさんに話しかけ縄をほどかせ、きねをおばあさんの頭に打ちおろした。おばあさんは倒れ、それきり起き上がらなかった。たぬきは逃げた。
Evaluation 2	あくる日、おじいさんが泣いているところにうさぎが登場。うさぎは話を聞き、怒る。
Resolution 2	うさぎはたぬきをさそい薪拾いにでかける。たぬきが背負った薪に火をつけ、たぬきは火をやる。たぬきのもとを訪れたうさぎは薬と称してからしを背中に塗る。春になり、うさぎはたぬきを釣りに誘う。たぬきの泥船が溶けだして船は沈み、たぬきは川を流されていった。たぬきは二度と姿を現さなかった。

各テキストの段階のみを取り出して比較した。

(6)

楠山テキスト	平田テキスト	竹崎テキスト	ささきテキスト
Orientation	Orientation	Orientation	Orientation
Complication 1	Complication 1	Complication 1	Complication 1
Evaluation 1	Evaluation 1	Evaluation 1	Evaluation 1
Resolution 1	Resolution 1	Resolution 1	Resolution 1
Complication 2	Complication 2	Complication 2	Complication 2
Evaluation 2	Evaluation 2	Evaluation 2	Evaluation 2
Resolution 2	Resolution 2	Resolution 2	Resolution 2
	Coda		

テキストの長さ（文字数）の差はあれども、基本的な構造にはほぼ相違がなかった。しかし、平田テキストのみ終結部を持っていた。平田テキストの終結部では、悪さをしたたぬきが反省し、うさぎ・おじいさん・おばあさんとの仲直りが描写されている。この終結部を持つことにより、謝罪と仲直りが前景化されるという効果を持つと考えられる。平田テキスト以外の3つのテキストでは物語のクライマックスがうさぎによるかたき討ちとなっているが、平田テキストではクライマックスが謝罪と仲直りとなっているわけである。

4. 語彙—文法の分析：Complication 2 を中心に

おじいさんに捕まり、縛られたたぬきがおばあさんを騙し逃げ出す複雑化 2 において表現の差異がみられた。これは前節のジャンル構造の相違とも関連する。

(7)

a. 楠山テキスト

するとたぬきは、

「やれやれ。」

としばられた手足(てあし)をさすりました。そして、

「どれ、わたしがついてあげましょう。」

と言(い)いながら、おばあさんのきねを取(と)り上(あ)げて、麦(むぎ)をつくふりをして、いきなりおばあさんの脳天(のうてん)からきねを打(う)ち下(お)ろしますと、「きゃっ。」という間(ま)もなく、おばあさんは目をまわして、倒(た)おれて死(し)んでしまいました。

たぬきはさっそくおばあさんをお料理(りょうり)して、たぬき汁(じる)の代(か)わりにばばあ汁(じる)をこしらえて、自分(じぶん)はおばあさんに化(ば)けて、すました顔(かお)をして炉(ろ)の前(まえ)に座(すわ)って、おじいさんの帰(かえ)りを待(ま)ちうけていました。

(中略)

「ばばあくったじい、

流(なが)しの下(した)の骨(ほね)を見(み)ろ。」

とたぬきは言(い)いながら、大きなしっぽを出(だ)して、裏口(うらぐち)からついと逃(に)げていきました。

b. 平田テキスト

おばあさんは、とうとうだまされて、たぬきのなわをほどいてしまいました。

「さあ、このきねで、おいしいおもちをついておくれ。」

たぬきはきねをうけとると、とたんに、

「わっはっは一のポンポコリン。さあ、だましてやってぞ。もちつきはこうやるんだ。」

と、いきなりきねをふりあげて、おばあさんめがけてうちおろしました。

ゴッーン！ 「きゃあ！ うーん……。」

とおばあさんは、気をうしなってしまうました。 たぬきは、家じゅうのたべものをぬすんで、にげていきました。

c. 竹崎テキスト

ばあさんは、なわをほどいてやりました。

とたんにたぬきは、ばあさんをころして、自分が、ばあさんにばけました。

しばらくすると、じいさんが、かえってきました。

「ばあさんや、たぬきじるは、できたかえ。」

「できたのは、ばばじるさ。えんの下、見ろや。」

と、たぬきは、にげていきました。

えんの下には、ばあさんのほねときものが、ありました。

d. ささきテキスト

おばあさんが、なわをほどいたとたん、たぬきは、おばあさんの頭に、きねを打ちおろした。

おばあさんは、ぼったりたおれ、それきり起きあがらなかった。 たぬきはゆうゆうと山へにげていった。

下線部に注目すると、(a, c) ではたぬきがおばあさんを「殺す」もしくは「おばあさんが死ぬ」ことが記述されており、(d) では「おばあさんの死」が暗示されている一方、(b)はおばあさんが「気を失う」だけであって他とは異なっていることが分かる。これと関連して、二重下線部に注目すると、(a,c) ではおばあさんの骨と服についての記述がある。

起動的解釈の観点からとらえれば、(b)の「たぬきがおばあさんをころす」が最もたぬきの関与度が高く、つぎに(a)が「たぬきがきねをふりおろしたことによって死んだ」が続く。さらに、(d)の「おばあさんの死」の暗示により、たぬきの関与度は(a,b)よりは低くなる。(b)にいたってはおばあさんは死なず、たぬきの悪行がもっとも低く見積られる。

(b)の平田テキストでは、この複雑化2の段階においておばあさんが亡くなっていないことが終結部での仲直りを可能にしていると捉えることができる。

5. 教育的示唆：指導上の留意点

以上の分析から、次のような示唆が得られる。幼児・児童が触れるテキストによっては、同じタイトル・プロットであってもテキストの構造の相違、語彙や文法の相違があり、保育者は読み聞かせなどを行う前に可能な限

りこうした差異について知っておく必要があるだろう。再話にあたって暴力的な表現を書き換えたり、省略したりすることがあることも分かるだろう。

竹崎テキストやささきテキストのように、他のテキストと比べると文字数が圧縮されているものについては、本稿では十分に触れることができなかったが、どの要素を残し、どの要素をそぎ落としているのかも比較検討する必要があるだろう。それにより、幼児が物語のどの部分に注目してストーリーを理解しているのか、文と文の間のつながりをどう理解しているのかについてより深く知る手がかりとなるはずである。

指導の際は、圧縮されたタイプのテキストについては文法や語彙に注目させ、文間のつながりやジャンル構造の展開について「なぜだろう？」という問いかけを幼児・児童に投げかけてもよいのではないだろうか。

6. おわりに

本稿では『かちかち山』の再話を4種類取り上げジャンル構造分析と語彙—文法の分析を行った。『かちかち山』には様々な起源があるようで(辰巳 1995)、それらを詳細に検討することはできなかったが、同じタイトルであっても再話者の判断によってテキスト構造や表現方法が変えられることがあることが分かった。

本稿ではテキストのすべての文・節の語彙—文法分析までは行うことができなかった。今後は大規模コーパスなども活用し、より細密度の高い分析を行いたい。

また、指導法についても現場からのフィードバックなどを得ながらさらなる検討を重ねたい。

【参考文献】

- 岸井勇雄ほか編(2004)『現代幼児教育研究シリーズ 8 言葉 改訂版』チャイルド本社.
- 龍城正明編(2006)『ことばは生きている 選択体系機能言語学序説』くろしお出版.
- 辰巳 義幸(1995)「形違い絵本考 3: わが国の昔話絵本-その2-かちかち山他」『大阪城南女子短期大学研究紀要 30』,pp.23-54.
- 三宅英文(2006)『選択体系機能文法と言語芸術』安田女子大学言語文化研究所.
- 山口登(2000)「選択体系機能理論の構図 —コンテキスト・システム・テクスト—」小泉保編『言語研究における機能主義』くろしお出版. pp. 3-48.
- Martin, J.R. & D. Rose (2008) *Genre Relations*. London: Equinox.
- Teruya, K. (2007) *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. London: Continuum.

